

ワールドカップサッカー・ドイツ大会における日本代表の成績の原因帰属 ：愛国心とナショナリズムの影響^{1) 2)}

Causal Attribution for the Results of Japanese Team Performances in the 2006 World Cup Soccer Games
: The Impacts of Patriotism and Nationalism.

佐久間 勲*, 藤島 喜嗣**

Isao SAKUMA

Yoshitsugu FUJISHIMA

1. 問題

本研究の目的は以下の2つである。第一に2006年に開催されたワールドカップサッカー・ドイツ大会（以下、W杯大会）を対象として、日本人大学生が日本代表の試合結果やW杯大会の成績について、どのような原因に帰属するかを検討することである。第二に、これらの原因帰属に、愛国心 (patriotism) とナショナリズムといった個人差変数がどのように影響するかを検討することである。

1-1. 内集団奉仕的帰属

自己の行為に関する原因帰属を扱った研究では、自己にとって都合のよい原因帰属がなされることが指摘されている。具体的には、自己の成功は内的要因（例えば能力）に帰属される一方で、失敗は外的要因（例えば課題の困難さや運）に帰属される傾向が見られている。こうした傾向は自己奉仕的バイアス (self-serving bias) と呼ばれている (Bradley, 1978; Miller & Ross, 1975)。

自己奉仕的バイアスは、自己の行為に関する原因帰属において見られる現象である。それに対して、内集団や内集団成員の行為に関する原因帰属においても、自己奉仕的バイアスと同様の現象が見られている (Hewstone, 1990; Pettigrew,

1979)。例えば、同じ行為であっても、その行為がなされた集団の成員性によって原因帰属が異なり、内集団成員による望ましい行為は外集団成員による同様の行為と比較して、より内的要因に帰属される一方、内集団成員による望ましくない行為は外集団成員による同様の行為と比較して、より外的要因に帰属される (Hewstone, 1990)。また、内集団や内集団成員の行為が成功か失敗かによって原因帰属が異なり、内集団や内集団成員の成功は内的要因に帰属される一方で、失敗は外的要因に帰属される (村本・山口, 1997; Wann & Dolan, 1994)。このように内集団や内集団成員にとって都合のよい原因帰属がなされる傾向は、内集団奉仕的帰属 (集団奉仕的帰属、集団奉仕的バイアス) と呼ばれている (Hewstone & Ward, 1985; 村本・山口, 1997)。内集団奉仕的帰属によって、われわれは内集団の肯定的な印象を維持したり、外集団の否定的な印象 (いわゆる偏見) を形成・維持したりするという (Pettigrew, 1979)。

実証的研究でも、内集団奉仕的帰属が生じることが繰り返し確認されている。例えば、シナリオ実験 (架空の場面において集団成員による行為の原因を回答させる実験) でも、その傾向が確認されている (Hewstone & Ward, 1985;

* 文教大学湘南総合研究所研究員・文教大学情報学部准教授

** 文教大学湘南総合研究所研究員・昭和女子大学大学院生活機構研究科准教授

1 本研究はW杯サッカー研究会 (研究代表者: 村田光二) による研究成果の一部である。

2 本論文の執筆にあたり文教大学湘南総合研究所の共同研究の助成を得た。記して感謝する。

Islam & Hewstone, 1993; 馬, 2003; Taylor & Jaggi, 1974)。さらに現実場面、特にスポーツの成績(勝敗)を扱った研究でも、その傾向が確認されている(Fujishima, Murata, Ito, & Sakuma, 1999; 村田, 2003; 佐久間, 2005; Wann & Dolan, 1994)。

そこで本研究では、先行研究(Fujishima et al., 1998; 村田, 2003; 佐久間, 2005; Wann & Dolan, 1994)と同様に、スポーツの成績を対象として、内集団成員に関する原因帰属がどのようになされるかを検討する。具体的には、W杯大会における日本代表の試合結果と成績を取りあげて、日本人大学生にとって内集団成員である日本代表の試合結果と成績の原因帰属が、内集団にとって都合のよいものになるかを検討する。

1-2. 愛国心とナショナリズム

愛国心とナショナリズムは概念的に異なるものであることが指摘されている。例えば、Kosterman & Feshbach (1989) は、愛国心を自国に対する愛着(attachment)、ナショナリズムを自国の優越性、優位性に関する意識であるとして、両者を区別している。そして愛国心とナショナリズムのそれぞれを測定する尺度を作成している。Karasawa (2002) も同様に、愛国心とナショナリズムを区別した上で、日本人を対象にそれらを測定する尺度を作成している。そしてアメリカ人を対象に実施された先行研究と比較した上で、愛国心、ナショナリズムを含む国家態度には、日本人とアメリカ人に共通する部分と日本人特有の部分があることを指摘している。

さらに愛国心とナショナリズムがもたらす影響についても異なることが指摘されている。例えばKarasawa (2002) は、ナショナリズムが外集団の否定的な評価に結びつく一方、愛国心が必ずしも外集団への反感に結びつかないことを指摘している。そして日本人を対象とした質問紙調査の結果、ナショナリズムは否定的な外国

イメージに結びつく一方、愛国心は内集団である日本の肯定的なイメージに結びつくことを見出している。村田・稲葉・向田・佐久間・樋口・高林(2007)も日本人を対象に、愛国心とナショナリズムが日本人を含む国民イメージに及ぼす影響を検討している。その結果、ナショナリズムは日本人イメージを高め、かついくつかの外国人イメージを低めるが、愛国心は日本人を含むいくつかの国民イメージを高めることを見出している。

こうした愛国心とナショナリズムの影響は国家イメージ、国民イメージだけでなく、内集団である自国や自国民、そして外集団である諸外国や諸外国人の行為に関する原因帰属にも影響すると考えられる。実際に佐久間(2005)は、日本人女子短期大学生を対象に、W杯韓日大会における日本代表と韓国代表の成績の原因帰属に愛国心が及ぼす影響を検討している。その結果、愛国心が強いほど、内集団である日本代表に都合のよい帰属をすること、つまり内集団奉仕的帰属の傾向が強くなることを見出している。ただし佐久間(2005)は、ナショナリズムが及ぼす影響については検討していない。そこで本研究では、愛国心とナショナリズムの両方を取り上げて、それらが原因帰属に及ぼす影響を検討する。具体的には、愛国心とナショナリズムが内集団奉仕的帰属の傾向を強めるかを検討する。

2. 方法

2-1. 調査対象者

関東地方にある7つの4年生大学で、心理学関連の講義を受講している大学生を対象に質問紙調査を実施した。そのうちW杯大会前に実施した事前調査とW杯大会予選リーグ終了以降に実施した事後調査の両方に回答した858人(男性434人、女性424人)を分析対象者とした。³

3 留学生については分析から除外した。

2-2. 調査の実施時期⁴

(1) **事前調査** W杯大会開催前の2006年5月9日から12日までに実施した。

(2) **事後調査** 3つの大学では予選終了後の2006年6月27日から30日までに実施した。残りの大学では決勝戦終了後の2006年7月12日から7月14日に実施した。事後調査を予選終了後に回答した調査対象者は451人(男性281人、女性170人)、決勝終了後に回答した調査対象者は407人(男性153人、女性254人)であった。

2-3. 分析に使用した質問項目

(1) **愛国心尺度とナショナリズム尺度** 村田・稲葉・向田・佐久間・樋口・高林(2005; 2007)の愛国心尺度、ナショナリズム尺度の一部を使用した(付表1参照)。愛国心尺度には5つの質問項目、ナショナリズム尺度には4つの質問項目が含まれていた。それぞれの質問項目に対して7件法で回答を求めた(1:全くあてはまらない~7:非常にあてはまる)。

(2) **日本代表の試合結果の原因帰属** 予選リーグにおける日本代表の試合結果について、内的要因および外的要因がどの程度影響したと思うか、試合ごとに回答を求めた。内的要因は「日本代表チームの要因」、外的要因は「日本代表チーム以外の要因」として、それらが試合結果にどの程度影響したと思うか7件法で回答を求めた(1:全く影響しなかった~7:非常に影響した)。

(3) **日本代表の成績の原因帰属** 13個の要因(付表2参照)を提示して、それらの要因がどの程度W杯大会における日本代表の成績に影響を及ぼしたか7件法で回答を求めた(1:全く影響しなかった~7:非常に影響した)。

(4) **W杯大会における日本代表の試合結果・成績についての知識** 予選リーグにおける日本代

表のオーストラリア戦、クロアチア戦、ブラジル戦の試合結果、W杯大会で日本代表が予選リーグ突破できなかったという結果を知っていたかどうか2件法で回答を求めた。

(5) **予選リーグの日本戦の視聴状況** 予選リーグにおける日本戦の中継について、試合ごとにどの程度視聴していたか5件法で回答を求めた(1:全く見なかった~5:最初から最後まで全部見た)。

(6) **報道への接触** W杯大会開催後から事後調査の時点までに、W杯大会に関する報道にどの程度接触したか回答を求めた。具体的には、テレビの試合中継、テレビニュース、特集番組、新聞、雑誌、インターネットによるW杯大会に関する報道への接触の程度について5件法で回答を求めた(1:全く見なかった~5:非常によく見た)。

(7) **デモグラフィック変数** 性別、年齢について回答を求めた。

分析に使用した質問項目のうち、愛国心尺度、ナショナリズム尺度、デモグラフィック変数に関しては、事前調査に含まれていた。それ以外の質問項目に関しては、事後調査に含まれていた。

2-4. 調査の実施方法

事前調査、事後調査ともに講義時間の一部を使用して実施した。

3. 結果

3-1. 日本代表の試合結果の原因帰属

調査対象者が予選リーグにおける日本代表の試合結果について、どのような原因に帰属していたかを検討した。この検討にあたり、それぞれの試合の結果を知っていると回答した者を分析対象者とした。その結果、オーストラリア戦については804人、クロアチア戦については788

4 W杯大会は2006年6月10日に開幕、7月10日に閉幕した。予選リーグの日本対オーストラリア戦は6月12日、対クロアチア戦は6月19日、対ブラジル戦は6月23日にそれぞれ行われた。日付はいずれも日本時間である。

人、ブラジル戦については816人が分析対象者となった。⁵

事後調査の実施時期ごとに、内的要因および外的要因に関する質問項目への回答の平均値を算出して表1に示した。それぞれの試合ごとに、内的要因と外的要因への帰属の程度に差があるか、さらに事後調査の実施時期の影響があるかを検討するために、原因の所在(内的要因/外的要因)×事後調査の実施時期(予選終了後/決勝終了後)の2要因の分散分析を実施した(前者は被験者内要因、後者は被験者間要因)。

(1) オーストラリア戦 原因の所在の主効果が有意であった($F(1,797)=348.19, p<.001$)。オーストラリア戦の結果(敗戦)を、外的要因($M=4.45$)よりも内的要因($M=5.66$)に帰属していた。さらに事後調査の実施時期の主効果が有意であった($F(1,797)=11.93, p<.01$)。事後調査の実施時期が決勝終了後($M=4.92$)よりも予選終了後($M=5.18$)で平均値が高かった。

(2) クロアチア戦 原因の所在の主効果が有意であった($F(1,781)=257.20, p<.001$)。クロアチア戦の結果(引き分け)を、外的要因($M=4.41$)よりも内的要因($M=5.38$)に帰属していた。

(3) ブラジル戦 原因の所在の主効果が有意であった($F(1,807)=11.12, p<.01$)。ただしこの主効果は、原因の所在×事後調査の実施時期の交互作用効果に制限された($F(1,807)=5.00, p<.05$)。この交互作用を検討するために、事後調査の実施時期ごとに原因の所在の単純主効果を検討した。その結果、事後調査が予選終了後に実施されたデータでは、原因の所在の単純主効果が有意であり($F(1,807)=16.61, p<.001$)、試合結果(敗戦)を内的要因($M=4.99$)よりも外的要因($M=5.42$)に帰属していた。他方、事後調査が決勝終了後に実施されたデータでは、原因の所在の単純主効果は有意でなかった($F(1,807)=0.57, ns$)。

3-2. 日本代表の成績の原因帰属

調査対象者がW杯大会における日本代表の成績について、どのような原因に帰属していたかを検討した。この分析にあたり、W杯大会において日本代表が予選を突破できなかったことを知っている回答した826人を分析対象者とした。

日本代表の成績の原因帰属を尋ねた質問項目を、日本代表チームに関するもの(内的要因、

表1 試合ごとの原因帰属および内集団奉仕的帰属得点の平均値(標準偏差)

試合	予選終了後			決勝終了後		
	内的要因a	外的要因a	内集団奉仕的帰属得点b	内的要因a	外的要因a	内集団奉仕的帰属得点b
オーストラリア戦	5.81 (1.24)	4.55 (1.49)	-1.26 (1.80)	5.48 (1.42)	4.35 (1.45)	-1.13 (1.82)
クロアチア戦	5.42 (1.27)	4.41 (1.40)	-1.01 (1.78)	5.34 (1.39)	4.41 (1.32)	-0.93 (1.58)
ブラジル戦	4.99 (1.59)	5.42 (1.70)	0.43 (2.31)	5.10 (1.54)	5.19 (1.65)	0.09 (2.04)

a: 範囲は1~7。値が大きいくほど、それぞれの試合結果に日本代表の内的要因、外的要因が影響していると考えていることを意味する。

b: 範囲は-6~+6。値が0を越えて+6に近づくほど、日本代表の内的要因よりも外的要因が、それぞれの試合結果に影響していると考えていたこと、0を下回り-6に近づくほど、外的要因よりも内的要因がそれぞれの試合結果に影響していると考えていたことを意味する。

5 W杯大会の日本代表の予選リーグの試合結果は、対オーストラリア戦は1対3で敗戦、対クロアチア戦は0対0で引き分け、対ブラジル戦は1対4で敗戦であった。最終的な成績は、1分け2敗で予選リーグ敗退であった。

6個)と日本代表チーム以外の(外的要因、7個)に分類して尺度の信頼性を検討した。尺度ごとにクロンバックの α 係数を算出したところ、内的要因尺度が.72、外的要因尺度が.64であった。いずれの尺度も内的一貫性があると判断して、それぞれの尺度の平均値を算出して、内的要因得点、外的要因得点とした。得点が高いほど、日本代表の成績に内的要因、外的要因が影響していると判断していたことを意味する。事後調査の実施時期ごとに算出した内的要因得点と外的要因得点の平均値は表2の通りであった。

試合結果の原因帰属の分析と同様に、原因の所在(内的要因得点/外的要因得点)×事後調査の実施時期(予選終了後/決勝終了後)の2要因の分散分析を実施した(前者は被験者内要因、後者は被験者間要因)。その結果、原因の所在の主効果が有意であった($F(1,805)=680.44, p<.001$)。ただしこの主効果は原因の所在×事後調査の実施時期の交互作用効果に制限された($F(1,805)=4.89, p<.05$)。この交互作用を検討するために、事後調査の実施時期ごとに原因の所在の単純主効果を検討した。その結果、事後調査の実施時期にかかわらず、原因の所在の単純主効果は有意であり($F_s(1,805)>268.07, p_s<.001$)、日本代表の結果(予選敗退)について、外的要因よりも内的要因に帰属していた。平均値のパターンを見ると、外的要因得点は、事後調査の実施時期が予選終了後よりも決勝終了後で高くなっていた(予選終了後： $M=4.39$ 、決勝終了後： $M=4.60$)。

3-3. 愛国心とナショナリズムが原因帰属に及ぼす影響

(1) 愛国心尺度とナショナリズム尺度の得点の算出 愛国心とナショナリズムが原因帰属に及ぼす影響を検討するために、まず愛国心尺度とナショナリズム尺度の信頼性を分析した。それぞれの尺度について、クロンバックの α 係数を算出したところ、愛国心尺度は.86、ナショナリズム尺度は.62であった。いずれの尺度に関しても内的一貫性が高いと判断して、それぞれの尺度の平均値を算出して愛国心得点、ナショナリズム得点とした。得点が高いほど愛国心、ナショナリズムが強いことを意味する。愛国心得点の平均は5.07($SD=1.11$)、ナショナリズム得点は4.46($SD=0.97$)であった。そして2つの得点間の間には中程度の正の相関が見られた($r=.36, p<.001$)。

(2) 内集団奉仕的帰属得点の算出 予選リーグの試合ごとに、外的要因の質問項目への回答から内的要因の質問項目への回答を引いて得点を算出した。W杯大会における日本代表の成績についても同様に、外的帰属得点から内的帰属得点を引いて得点を算出した。得点が高くなるほど、内集団成員である日本代表の望ましくない結果(敗戦、引き分け、予選リーグ敗退)を外的要因に帰属していることを意味するので、これらの得点を内集団奉仕的帰属得点とした。それぞれの試合、W杯大会の内集団奉仕的帰属得点の平均値を事後調査の実施時期ごとに算出して表1、表2に示した。

表2 W杯大会の日本代表の成績の原因帰属および内集団奉仕的帰属得点の平均値(標準偏差)

予選終了後			決勝終了後		
内的要因得点a	外的要因得点a	内集団奉仕的帰属得点b	内的要因得点a	外的要因得点a	内集団奉仕的帰属得点b
5.35 (0.83)	4.39 (0.83)	-0.95 (0.91)	5.40 (0.92)	4.60 (0.85)	-0.80 (1.00)

a：範囲は1～7。値が大きいほど、それぞれの試合結果に日本代表の内的要因、外的要因が影響していると考えていることを意味する。

b：範囲は-6～+6。値が0を越えて+6に近づくほど、日本代表の内的要因よりも外的要因が、0を下回り-6に近づくほど、外的要因よりも内的要因がW杯大会の成績に影響していると考えていたことを意味する。

(3) 試合結果の原因帰属に及ぼす影響 愛国心とナショナリズムが、それぞれの試合結果の原因帰属に及ぼす影響を検討するために重回帰分析を実施した。分析にあたっては、それぞれの試合の結果を知っていると回答した者を分析対象者とした。事後調査の実施時期が予選リーグの試合結果の原因帰属に影響を及ぼしていたので、事後調査の調査実施時期ごとに分析を行った。愛国心得点、ナショナリズム得点、試合中継の視聴の程度、性別、年齢を独立変数（一括投入）、それぞれの試合ごとの内集団奉仕の帰属得点を従属変数として重回帰分析を実施した。重回帰分析の結果を表3に示した。

①オーストラリア戦 事後調査の実施時期が予選終了後、決勝終了後のいずれにおいても、愛国心得点、ナショナリズム得点の効果は有意ではなかった。

②クロアチア戦 事後調査の実施時期が予選終了後のデータにおいて、ナショナリズム得点

の効果がありであった ($\beta=.116, t=2.20, p<.05$)。ナショナリズムが強いほど内集団奉仕の帰属の傾向が強くなっていた。

③ブラジル戦 事後調査の実施時期が予選終了後のデータにおいて、ナショナリズム得点の効果がありであった ($\beta=.126, t=2.34, p<.05$)。クロアチア戦での分析結果と同様に、ナショナリズムが強いほど内集団奉仕の帰属の傾向が強くなっていた。

(4) W杯大会の成績の原因帰属に及ぼす影響 愛国心とナショナリズムがW杯大会の日本代表の成績の原因帰属に及ぼす影響を検討するために、重回帰分析を実施した。分析にあたり、W杯大会において日本代表が予選を突破できなかったことを知っている人と回答した人を分析対象者とした。事後調査の実施時期が日本代表の成績の原因帰属に影響を及ぼしていたので、事後調査の実施時期ごとに分析を行った。愛国心得点、ナショナリズム得点、W杯大会報道への接

表3 内集団奉仕の帰属得点（試合結果）に関する重回帰分析の結果

独立変数	オーストラリア戦		クロアチア戦		ブラジル戦	
	β	t	β	t	β	t
【事後調査・予選終了後】						
愛国心得点	.022		.042		-.083	
ナショナリズム得点	.071		.116	2.20*	.126	2.34*
対戦国との試合中継の視聴	-.024		.000		.084	1.66+
性別（男性：1、女性：2）	.015		.042		.049	
年齢	-.016		-.053		-.056	
R^2	.008		.026		.028	
【事後調査・決勝終了後】						
愛国心得点	-.055		-.006		-.054	
ナショナリズム得点	.005		-.064		.089	
対戦国との試合中継の視聴	-.056		-.113	-2.05*	-.059	
性別（男性：1、女性：2）	-.069		.002		-.042	
年齢	-.060		-.067		-.095	-1.74+
R^2	.011		.023		.018	

注) β が有意である場合のみ t 値を記した。* $p<.05$ 、+ $p<.10$

触の程度、性別、年齢を独立変数（一括投入）、日本代表の成績の内集団奉仕の帰属得点を従属変数とした重回帰分析を実施した。独立変数に投入したW杯大会報道への接触の程度は、W杯大会開始から事後調査までに6種類の情報源からの報道に接触した程度の平均値を用いた（クロンバックの α 係数は.85）。重回帰分析の結果を表4に示した。その結果、事後調査の実施時期にかかわらず、愛国心得点、ナショナリズム得点の効果は有意ではなかった。

4. 考察

本研究の目的は、W杯大会を対象として、日本大学生が日本代表の試合結果と成績について、どのような原因に帰属するか、さらにこの原因帰属に愛国心とナショナリズムがどのような影響を及ぼすかを検討することであった。ここでは、原因帰属の結果、愛国心とナショナリズムが原因帰属に及ぼす影響についての結果の順番に考察を行う。

4-1. 試合結果およびW杯大会の成績の原因帰属

予選リーグにおける日本代表のオーストラリア戦とクロアチア戦の試合結果、W杯大会の日本代表の成績については、外的要因よりも内的要因に帰属していた。これらの結果は、内集団成員である日本代表の望ましくない結果を外的要因よりも内的要因に帰属していたので、内集団卑下の帰属が生じていたことを示唆するものであった。ただし本研究で見出された内集団卑下の傾向はバイアスではなく、事実に基づく回答であった可能性も考えられる。オーストラリア戦、クロアチア戦ともに日本代表の試合は不甲斐のないものであったために、これらの試合結果を外的要因よりも内的要因に帰属する傾向は事実と符合するものであったかもしれない。W杯大会の日本代表の成績の原因帰属についても、同様の可能性が指摘できるだろう。

一方、日本代表のブラジル戦の結果については、内的要因よりも外的要因に帰属していた。この結果は、内集団奉仕的帰属が生じていたこ

表4 内集団奉仕的帰属得点（W杯大会の成績）に関する重回帰分析の結果

独立変数	β	t
【事後調査・予選終了後】		
愛国心得点	.011	
ナショナリズム得点	-.047	
報道への接触	-.126	-2.41*
性別（男性：1、女性：2）	-.023	
年齢	-.094	-1.87+
R^2	.024	
【事後調査・決勝終了後】		
愛国心	.076	
ナショナリズム得点	-.018	
報道への接触	-.006	
性別（男性：1、女性：2）	-.083	
年齢	-.018	
R^2	.012	

注) β が有意である場合のみ t 値を記した。* $p < .05$ 、+ $p < .10$ 。

とを示唆するものであった。ただしブラジル戦についても、内集団奉仕的帰属が生じていたのではなく、事実に基づく回答であった可能性も考えられる。対戦国であるブラジルは過去の大会で5回の優勝経験があり、常に優勝候補に挙げられている強豪国である。こうした情報を踏まえると、ブラジル戦での原因帰属の結果も、内集団奉仕的帰属というバイアスを示したのではなく、日本代表よりもブラジル代表の方が強いという事実に基づく回答であった可能性も否定できない。

ブラジル戦およびW杯大会の成績の原因帰属において、事後調査の実施時期の影響が見られた。いずれも、事後調査が予選終了後のデータで、試合結果を内的要因よりも外的要因に帰属したり、その傾向が強くなったりしていた。事後調査の実施時期によって原因帰属に差が見られた理由としては、試合結果の鮮明さが影響した可能性が考えられる。結果（敗戦、予選リーグ敗退）が生じてから事後調査の実施時期が近いほど、結果が鮮明であったために、その鮮明さが原因帰属に影響したと推測される。

4-2. 愛国心とナショナリズムが原因帰属に及ぼす影響

重回帰分析の結果、事後調査が予選終了後のデータにおいて、ナショナリズムが原因帰属に影響していた。具体的には、クロアチア戦、ブラジル戦の原因帰属に影響していた。そしてそれは、ナショナリズムが強いほど内集団奉仕的帰属を強めることを示唆するものであった。ただし前述の通り、クロアチア戦に関しては、試合結果を外的要因よりも内的要因に帰属していたので、ナショナリズムが内集団奉仕的帰属の傾向を強めたというよりは、内集団卑下的帰属の傾向を弱めたという方が適切であろう。

ナショナリズムが内集団奉仕的帰属の傾向を強めたり、内集団卑下的帰属の傾向を弱めたりする理由としては、ナショナリズムが日本人の能力に関するイメージと関連していることが挙げられ

る。ナショナリズムは自国の優越性、優位性に関する意識である（Kosterman & Feshbach, 1989）。そのためにナショナリズムが強いことは、日本人の能力が高いというイメージにつながるだろう（村田他, 2007; 佐久間・村田, 2007）。日本代表の敗戦は、日本人の能力が高いというイメージと一致しない結果である。そこで日本代表の敗戦を外因的要因に帰属することで、日本人の能力が高いというイメージを維持したと考えられる。

一方、愛国心は原因帰属に影響していなかった。これは先行研究（佐久間, 2005）とは異なる結果であった。愛国心は自国に対する愛着（Kosterman & Feshbach, 1989）であり、日本人のあたたかいというイメージにつながると考えられる（村田他, 2007; 佐久間・村田, 2007）。日本代表の敗戦は、あたたかさという次元と関連しないために、日本人のあたたかいというイメージを悪化させる結果ではなかった。そのために愛国心は原因帰属に影響しなかったと考えられる。

4-3. 本研究の問題点と今後の課題

最後に本研究の問題点と今後の課題を挙げる。第一に、原因帰属の指標に関する問題である。本研究では、外的要因から内的要因を引いた得点を内集団奉仕的帰属の指標と考えて分析に使用した。ただし、この指標が内集団奉仕的帰属を示すものとして適切でなかった可能性が考えられる。その主な理由は、比較の対象がないということである。先行研究（村田, 2003; 佐久間, 2005; Wann & Dolan, 1994）では、内集団成員と外集団成員の同じ行為または結果に関する原因帰属を比較したり、内集団成員の成功と失敗の原因帰属を比較したりすることで内集団奉仕的帰属という現象を扱ってきた。それに対して本研究では、内集団成員の失敗だけを取り上げていたので、内集団奉仕的帰属と考えて使用した指標が、バイアスを示したものであるか、それとも事実に基づくものであるかは明確ではない。今後の研究では、比較対象を用意する必要があるだろう。

第二に、愛国心の影響についての問題である。本研究では、愛国心は原因帰属に影響していなかった。この結果は、佐久間 (2005) とは一致しないものであった。この理由の1つに、本研究で使用した内集団奉仕的帰属の指標と佐久間 (2005) のものが異なっていたことが挙げられる。今後、原因帰属の指標を先行研究と同様にした上で、愛国心が及ぼす影響について再度検討を行い、本研究の結果が再現されるかどうか検討する必要があるだろう。

第三に、ナショナリズムの影響に関する問題である。国家イメージや国民イメージに関する研究では、ナショナリズムが諸外国や諸外国人のイメージを低下させたり、自国民のイメージを向上させたりしていた (Karasawa, 2002; 村田他, 2007)。しかしながら本研究では、調査対象者にとって内集団である日本代表の成績の原因帰属だけを取り上げているので、ナショナリズムが外集団や外集団成員の成績の原因帰属に影響するかどうかは明らかではない。今後は、ナショナリズムが内集団や内集団成員だけでなく、外集団や外集団成員の行為の原因帰属に影響を及ぼすかどうか検討する必要があるだろう。

引用文献

- Bradley, G. W. (1978). Self-serving biases in the attribution process: A reexamination of the fact or fiction question. *Journal of Personality and Social Psychology*, **36**, 56-71.
- Fujishima, Y., Murata, K., Ito, T., & Sakuma, I. (1999). Ethnocentrism and causal attribution for defeat: A study of the '98 World Cup Soccer using Japanese sample. *Poster presented at 3rd conference of the Asian Association of Social Psychology*, Taipei, Taiwan.
- Hewstone, M. (1990). The 'ultimate attribution error'? A review of the literature on intergroup causal attribution. *European Journal of Social Psychology*, **20**, 311-335.
- Hewstone, M., & Ward, C. (1985). Ethnocentrism

- and causal attribution in South Asia. *Journal of Personality and Social Psychology*, **48**, 614-623.
- Islam, M. R., & Hewstone, M. (1993). Intergroup attributions and affective consequences in majority and minority groups. *Journal of Personality and Social Psychology*, **64**, 936-950.
- Karasawa, M. (2002). Patriotism, nationalism, and internationalism among Japanese citizens: An etic-emic approach. *Political Psychology*, **23**, 645-665.
- Kosterman, R., & Feshbach, S. (1989). Toward a measure of patriotic and nationalistic attitudes. *Political Psychology*, **10**, 257-274.
- 馬 偉軍 (2003). 中国人の帰属における自己奉仕的傾向と集団奉仕的傾向 社会心理学研究, **19**, 135-143.
- Miller D. T., & Ross, M. (1975). Self-serving biases in the attribution of causality: Fact or fiction? *Journal of Personality and Social Psychology*, **82**, 213-225.
- 村本由紀子・山口 勸 (1997). もうひとつのself-serving bias: 日本人の帰属における自己卑下・集団奉仕傾向の共存とその意味について 実験社会心理学研究, **37**, 65-75.
- 村田光二 (2003). 韓日W杯サッカー大会における日本大学生の韓国人、日本人イメージの変化と自己奉仕的帰属 日本グループ・ダイナミックス学会第50回大会発表論文集, 122-123.
- 村田光二・稲葉哲郎・向田久美子・佐久間 勲・樋口 収・高林久美子 (2005). アテネ・オリンピック報道と日本人・外国人イメージ (1) - 愛国心、ナショナリズム尺度の検討 - 日本社会心理学会第46回大会発表論文集, 64-65.
- 村田光二・稲葉哲郎・向田久美子・佐久間 勲・樋口 収・高林久美子 (2007). アテネ・オリンピック報道が日本人・外国人イメージに及ぼす影響 平成16年度～平成18年度科学研究費補助金 (基盤研究 (C)) 研究成果報告書
- Pettigrew, T. (1979). The ultimate attribution error: Extending Allport's cognitive analysis of

- prejudice. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 5, 461-476.
- 佐久間 勲 (2005). 内集団奉仕的帰属に関する研究: 韓日ワールドカップ・サッカー大会における日本と韓国の結果の帰属 情報研究 (文教大学), 33, 35-42.
- 佐久間 勲・村田光二 (2007). ワールドカップサッカー・ドイツ大会と日本人・外国人イメージの変化-愛国心とナショナリズムの影響-
- 日本社会心理学会第48回大会発表論文集, 792-793.
- Taylor, D. M., & Jaggi, V. (1974). Ethnocentrism and causal attribution in a south context. *Journal of Cross-Cultural Psychology*, 5, 162-171.
- Wann, D. L., & Dolan, T. J. (1994). Attributions of highly identified sports spectators. *Journal of Social Psychology*, 134, 783-792.

付表1 愛国心尺度とナショナリズム尺度

-
- ・ 日本人であることに、幸せを感じている。(愛)
 - ・ 日本人でよかったと思う。(愛)
 - ・ 日本人であることを誇りに思う。(愛)
 - ・ 日本が好きだ。(愛)
 - ・ 日本にはあまり愛着を持っていない。(愛、逆転項目)
 - ・ 日本の経済力を考えれば、国連や国際会議における日本の発言権はもっと大きくあるべきだ。(ナ)
 - ・ 日本が戦後驚異的な成長を遂げたのは、日本人が勤勉であったからだ。(ナ)
 - ・ 日本人は他の民族に比べて、とりたてて優秀な民族だとは思わない。(ナ、逆転項目)
 - ・ 日本の大幅な貿易黒字は優れた技術と努力の結果である。(ナ)
-

注) 愛：愛国心尺度、ナ：ナショナリズム尺度

付表2 日本代表の成績の原因帰属

-
- ・ 日本代表チームのまとまり (内)
 - ・ 日本選手のコンディション (調子) (内)
 - ・ 日本代表チームのサッカーの実力 (内)
 - ・ 日本代表チームの精神力 (内)
 - ・ ジーコ監督の采配 (内)
 - ・ 日本代表チームの身体能力 (内)
 - ・ 対戦チームの身体能力 (外)
 - ・ 対戦チームのサッカーの実力 (外)
 - ・ 運の良し悪し (外)
 - ・ 審判の判定 (外)
 - ・ 日本人サポーターの応援 (外)
 - ・ 試合会場の気温や天候 (外)
 - ・ 対戦チームの精神力 (外)
-

注) 内：内的要因に関する質問項目、外：外的要因に関する質問項目